

## 蓮如上人と一休禪師

中央仏教学院講師 守 快 信



だれでも本当に心を許せる友が一人はあるように思います。

本願寺第八代宗主の蓮如上人(1415~1496)にも、心を許せる友があったようです。その方は、臨済宗大徳寺の流れを汲む一休禪師(1394~1481)であったと伝えられます。

その一休禪師との歴史的交流は、寛正2(1461)年の親鸞聖人二百回の御遠忌に一休禪師が本願寺へ参詣されたということ以外には、現在のところ記録がないようです。しかし、同じ日野家につながる二人は、京はもちろん滋賀県の堅田や守山のみならず、堺や大和など到る処で動勢が重なることが多く、交流があったと理解する方が自然です。また、その先々のご旧跡には、伝えられている手紙や道歌などが多くあります。それを集めていくと、両上人の仏法(お念仏の教え)を中立とした親交の深さが伺えます。

ところで、禪師の人柄については、『狂雲集』等に、<sup>しんし</sup>真摯な禪師の生き方が読み取れる一方で、内心の赤裸々な表現も見られ、その両者が禅僧一休を形作っています。また、浄土(念仏)の教えにも理解があり、一説に蓮如上人の教化によって転宗したと噂されるほどです。また、仮名法語の『一休骸骨』は、後鳥羽上皇の「無常講式」では、「骸骨」が「髑髏(どくろ)」と書かれる後半部分とほとんど同じ趣旨で書かれ、この講式の前半部分を蓮如上人がお手紙の「白骨の章」に用いられたのと、非常に良く似た「無常」の理解がなされています。ここでも、両上人の親密な関係が伺えます。

「襟巻きの 暖かそうな黒坊主 こいつが法は天下一なり」

これは、禪師が二百回御遠忌に参詣のときに読まれたと伝えられるもので、親鸞聖人のお姿を前に、敬いの心をもって詠まれている歌の一つです。

次に、交流の言い伝えをテーマ別に整理してみることにしましょう。

最初に「娑婆」について。禪師が上人にお手紙で「あれしてこれして あれしてこれして……とかくこの世は忙しい」と長い巻紙に延々と書かれたそうです。それを読んだ上人が、早速返事を出されたといひます。「食て寝て 食て寝て 食て寝て 食て寝て……人は死ぬばかりなりけり」と、

長い巻紙に延々と書かれたということです。

この返事を読んだ禪師は、当に我が意を得たりと歎かれたといひます。お互いに仏法に立って人生の現実を直視されている内容です。

ところで、禪師にはこれ以外に次の句があります。「世の中は くうてかせいで 寝て起きて さてその後は死ぬるばかりぞ」これもまた、まさに私自身そのもので、お恥ずかしい次第で頭が下がります。

また、「慈悲」について。「阿弥陀には まことの慈悲はなかりけり たのむ衆生を より(選り)たすくとは」との禪師の歌。上人は「阿弥陀には へだつる心なけれども 蓋(ふた)ある水に月はやど(宿)らじ」と返されています。

このころは、「阿弥陀様は、十方(一切)衆生を摂取して(おさめとって)捨てないと願を立てられた以上、たのむとたのまずとに関わらず救うはずではないか、念仏の衆生だけを選ぶのは本当の慈悲ではないじゃないか」との問いに、上人が「阿弥陀様は、お慈悲をもって、私たちすべてを常に救おうとはたらき続けてくださり、分け隔てをされることはありません。しかし、私たちには自力(はからい・本願への疑い)の固い蓋があるから、はたらきを受け入れられないのです。だからお念仏を称えるものだけが救われていくのです」と返され、阿弥陀様の私へのお慈悲に反して、わたし自身のはからいの心(自力の行い)の根深さをお示しくださっています。

また、「浄土往生」について。「お浄土は 過十万億と聞くからは、足腰立たぬばば(婆々)は行けまい」との禪師の言葉。上人の方は、「お浄土は過十万億と聞きしかど 弥陀をたのめば 南無の一声」と応えられたといひます。この他にも「阿弥陀仏 悟ればすなわち 去此不遠(こしふおん) 迷えば遙か西にこそあれ」と禪師の浄土理解の深さを感じるとともに、上人のころを許されたお応えが伺えます。

お浄土は西の端の遠い世界(西方十万億の仏土を過ぎた所)のことで、死後の遠い世界のことでありと理解されがちですが、このことを戴くとき「ナモアミダブツ」のお念仏の一声が、お浄土への道(去此不遠)であることをあらためて気づかせて戴くことができます。

この両上人の交流を拝見する中に、受講生の皆様のお念仏の教えの理解と、仏法を中立にした一生の友との出遇いをもたれることを期待します。

(仏教学)